

第5回「バスに乗って～公共交通機関への第一歩～」

「いつか一人でバスに乗れるようになりたい」。あきらさん（仮名・22歳男性）がそう話してくれたのは、施設を利用し始めて半年が経った頃でした。あきらさんは軽度の知的障害がありますが、将来的な自立を目指しており、公共交通機関を使えるようになることは大きな目標の一つでした。

これまでの外出は、必ず家族や職員が車で送迎していました。バス停は施設から歩いて5分ほどの場所にあり、バスは1時間に2本程度運行していましたが、あきらさんにとってバスは「難しそうで怖いもの」でした。お金の支払い方法、降りるタイミング、乗り換えの方法など、覚えることがたくさんあるように思えたのです。

担当の田村職員は、あきらさんの「バスに乗りたい」という気持ちを大切にしたいと考えました。まずは段階的な練習計画を立て、少しずつバス利用に慣れていくことにしました。

最初のステップは、バス停での見学でした。あきらさんと田村職員は一緒にバス停に行き、バスが到着する様子、乗客が乗り降りする様子を観察しました。「バスって思ったより大きいですね」とあきらさんは少し驚いていましたが、「でも、みんな普通に乗っているから大丈夫そうです」と前向きな感想も口にしました。

次のステップは、バスの中での過ごし方の練習でした。施設内でバスの座席を模した椅子を並べ、乗車から降車までの一連の流れを何度も練習しました。「整理券を取って、お金を準備して、降りるボタンを押す」という手順を、あきらさんは真剣にメモを取りながら覚えていきました。

お金の計算も重要な練習項目でした。バス料金は距離によって変わるため、整理券の番号と運賃表を照らし合わせて正確な金額を支払う必要があります。あきらさんは最初、計算に時間がかかって不安になっていましたが、「焦らなくて大丈夫。みんな待ってくれますよ」と田村職員に励まされ、繰り返し練習しました。

そして、いよいよ実際のバス乗車体験の日がやってきました。目的地は施設から3つ目のバス停にある図書館で、往復約1時間の短い距離でしたが、あきらさんにとっては大きな挑戦でした。

バス停でバスを待っているとき、あきらさんの手は緊張で少し震えていました。「大丈夫ですか？」と田村職員が声をかけると、「緊張するけど、頑張ります」と答えました。その表情には不安と同時に、挑戦への強い意志が込められていました。

バスが到着すると、あきらさんは深呼吸をしてから乗車しました。整理券を取り、空いている座席に座ると、少しほっとした様子でした。「思ったより簡単でした」と小さく微笑みました。窓の外を眺めながら、「こんな景色が見えるんですね」と新鮮な驚きを口にしていました。

図書館の最寄りのバス停で降車する時も、あきらさんは落ち着いて降車ボタンを押し、運賃を支払うことができました。「やった！できました！」と喜びの声を上げ、田村職員と一

緒に図書館まで歩きました。

図書館で1時間ほど過ごした後、今度は帰りのバスに挑戦しました。行きで経験していたこともあり、あきらさんの動作はより自信に満ちていました。「もう慣れました」と言いながら、今度は一人で乗車手続きを行いました。

施設に戻ると、他の利用者さんたちが「おかえりなさい」「どうだった？」と温かく迎えてくれました。あきらさんは「バスに乗れました！思ったより簡単でした！」と興奮気味に報告しました。その日の日記には「初めてバスに乗りました。とても嬉しかったです。今度は一人で乗ってみたいです」と書かれていました。

この成功体験を受けて、あきらさんはより積極的に外出計画を立てるようになりました。次の目標は「一人でのバス乗車」に設定され、さらに練習を重ねることになりました。

数週間後、ついにあきらさんの一人でのバス乗車の日がやってきました。職員は遠くから見守る形で、あきらさんは完全に一人でバスに乗り、無事に目的地まで行って帰ってくることができました。

ご家族にこの報告をすると、お母さんは「まさか一人でバスに乗れるようになるなんて」と涙を流して喜んでくれました。お父さんも「これで行動範囲が広がりますね。将来への希望が持てます」と感激していました。

あきらさんの挑戦は、施設の他の利用者さんたちにも良い刺激を与えました。「僕も電車に乗ってみたい」「一人で買い物に行けるようになりたい」という声が聞かれるようになり、社会参加への意欲が高まりました。

公共交通機関の利用は、単なる移動手段以上の意味を持っています。それは自立への大きな一歩であり、社会の一員としての自信につながる重要な体験です。あきらさんの勇気ある挑戦は、私たちに可能性の大きさを教えてくれました。

今では、あきらさんは週末に一人でバスに乗って買い物に出かけるまでになりました。その自信に満ちた表情を見ていると、小さな一歩が大きな成長につながることを実感せずにはいられません。